

# 第一二〇話

## 伴別当相橘頼経事同妻事

『前太平記』上 卷第十八 三六五頁から三六七頁より

このように執り行われた祝賀に、橘頼経右馬允という者は、東三条殿とは懇意にしており、（その場にも）参上してお仕えしたので、一昨日から東二条殿に参上していたが、左馬権頭（頼光）より献上された駿馬の中の、大葦毛の馬をしきりにね

左馬権頭より進らせられし駿足の中、 大葦毛の馬を強ちに乞ひ

だり譲渡いただいたところ、（兼家は）すぐにこれをお与えになったのだった。

受けしかば、

頼経は歡喜する事はこの上なく、すぐに自宅に引かせ、自身は今（家に）帰ろうとして、家臣七八人をお連れしてうっとりとしながら帰ったのだった。

この時に、伴廉平別当とって、類まれな相人（老）がいたのだが、その技には不思議な力があって、推しはかるところは少しも間違うことがなかったので、民た

其術に妙を得て、 察する所毫釐も

ちはこの人を敬い信じないという者はいない。（その人は）ちょうど用事があつ

違ふこと無かりければ、 皆人之を尊信せずと云ふ者なし。

て、近衛油小路<sup>(貳)</sup>にある所に向かったところ、右馬允に遭遇した。互いに会釈をして通り過ぎた。十段ほど進んで、別当が声をあげて、「どうか、右馬允殿。少し申し上げるべきことがある」と呼び返した。頼経が一足でも早く帰って、あの大葦毛を湯で洗って庭で乗馬でもしようと急いでいたので、わざと聞こえないふりで進んだが、さらにしきりに呼びかけたところ、それでは（仕方ない）と思って、仕方なく立ち止まり振り返ってその（呼び止める）理由を聞く。別当が申し上げたことは、「私が趣味として人を占うことは、それがどれだけの人を占ったかということも分からない。しかし、一人として間違ったことはない。今貴方を占ったが、死相がはっきりとある。しかもすぐにそこに迫っている。早く家に帰ってその災難を排除してください」。頼経は大変驚き、「どう対処してこれを免れることが出来るのだろうか」。別当は、「それでは貴方が、このことを免れようとお思いになるならば、妻子に限らず近親の愛する者を殺すならば、死を免れるだろう。決してお疑いになるな。きっとお思い当たるだろう。さあ早く（お帰りになってください）」と言って、別当と別れたのだった。

頼経は不審に思う心がすっきりせず、呆気にとられて座っていたが、「私は決して死んでいくはずの我が身を惜しむべきではないが、しかし理由もなく死ぬようなことは、主君のため、一族のためではない。別当の言うように対処しよう。まず自分にとって愛する者は、妻子珍宝といっても、昨日頂戴した大葦毛の駿馬にはまさらない。大体武家に生まれて良い馬を好むのは、戦場での先陣を切り、良い敵に会

って、ある時は自身を守ろうとするためである。今この馬を殺して、死を免れるのも一つの手である」と思って急いで家に帰り、すぐに既に入って、三人張<sup>(参)</sup>に十三束<sup>(肆)</sup>をさっとながえ、引き絞って切り離そうとしていたが、この馬はその（主人の）心を解さず、主人を見てひっきりなしに嘶くのである。頼経はすぐに可哀想に感じる思いが湧いて、これを撃つのに忍びなく、また考え直して、「この馬を死ぬことを嫌がって私に鳴く。本当にその思いはいかにも懸命である。それだけではなく、今この馬を殺して、後日に『あの馬はどうした』とお尋ねがあった時、どうこのような事情と申し上げることが出来るだろうか。結局妻を殺すことに越したことはない」と頭を悩ませ、母屋を見ると、その妻が大きな革器<sup>(伍)</sup>によりかかり、白い紵<sup>(陸)</sup>の織物を裁ち縫いをして座っていたのを、引き絞って準備をしていた大きな狩股<sup>(漆)</sup>を、弦音を高く響かせシュッと放つ。その矢は妻の胸の間を射貫いて、後ろの革器に突き通、羽ぶくら<sup>(捌)</sup>を吸い込むようにして突き立った。頼経は近寄ってこれを見ると、深手であるので妻は一言も言わず死んでしまった。しかし、例の革器の中に声が聞こえて動いていたので、怪しく思い、すぐに開けて中を見ると、一人の僧が手に抜き身の刀を持ってうずくまり座っていたが、その矢は尻

一の僧手に白刃を持ちて踊り居たりしが、

彼矢臀を

を突きさして臍の上まで鏃が赤くなって射貫かれていた。まさに今死にそうにもが

穿って臍の上まで、鏃赤く射抜きたり。

いていたのを、その（家の中にいて刀を持っていた）理由だけは尋ねる。その男はまったく一言も言わずついに死んだのだった。すぐにその胸の中を見ると、一通の手紙がある。読んでみると妻の筆跡で、「昨日からこういった事情で、東二条殿に御参上なされたので、きっと今夜のうちに酩酊してお帰りになるだろう。これこそ待っていた夜である」と書いてあり、頼経を討とうとする計画の次第が、詳細にこれに書いてあった。

さて、別当の占いは少しも外れず、あの僧がひそかに妻と通じ、（頼経を）殺そうと計画したが、こうしてその災いを免れた。「噂されることには、別当は相者の

「謂つべし、別当は相者の

腕が人間とは思えない者である」と言って、世間の称嘆があったのだった。

神に入る者なり」

---

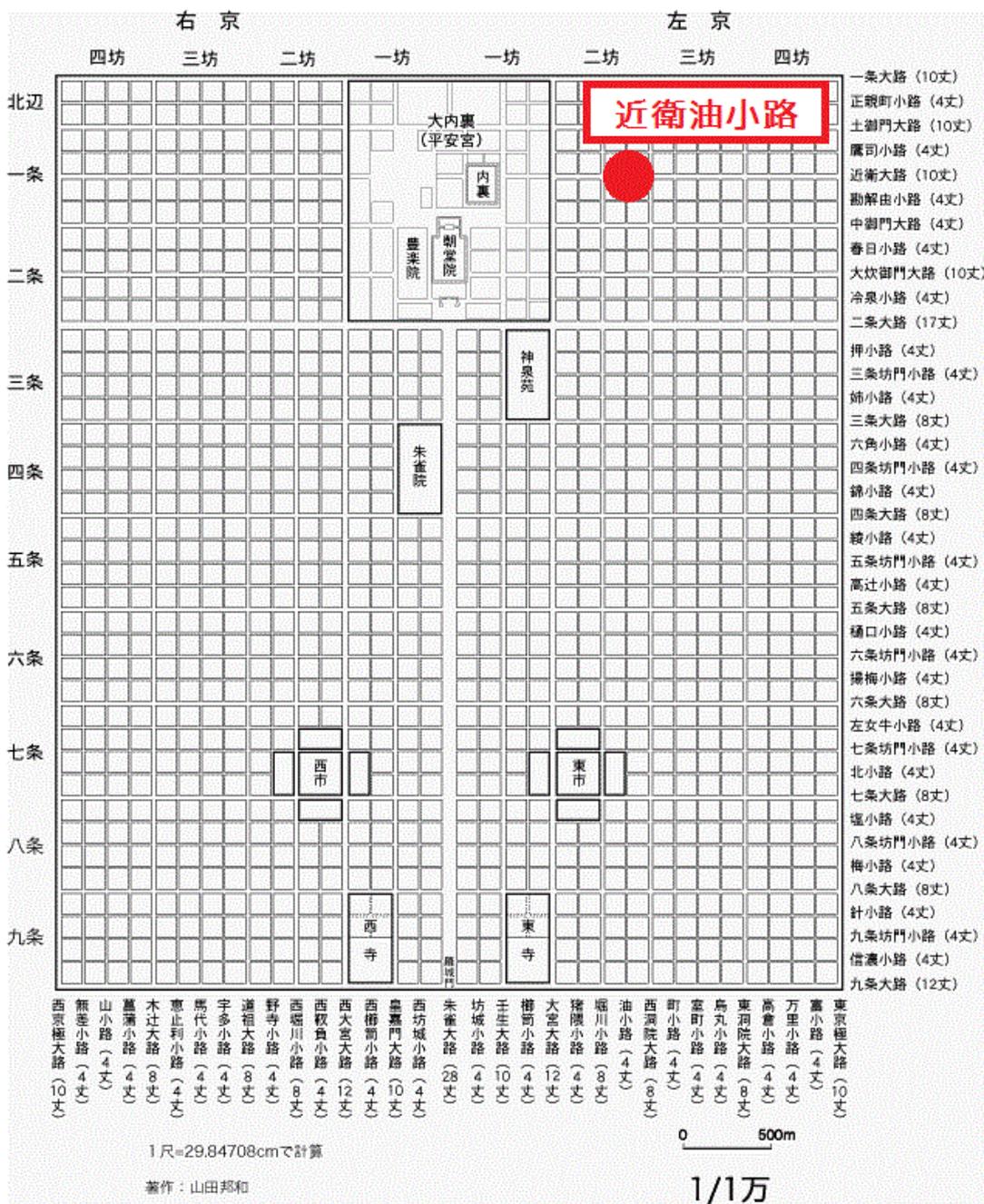
## 注釈

※壺・相人……人相を見る人。

※式・近衛油小路……地図参照。

<地図>

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※



※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。

※参・三人張……二人で弓をたわめ、もう一人がこれを引かなくてはならないような強い弓。

※肆・十三束……「束」は弓の長さの単位で、一束は指4本分。十三束は指52本分。

※伍・革器……不詳。革で出来た長櫃のようなものか？

※陸・紵……麻の一種。

※漆・狩股……先端が又の形に開いた内側に刃のある鎌。

※捌・羽ぶくら……矢についた羽。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2019/6/23

改訂：2021/3

海熊童子